

楽器 & 機材の基礎知識

STEP ZER ゼロ

図解！各部の名前を知ろう

楽器を演奏する前にまずしなければいけないことは、楽器そのものを知ることです。まだ自分のパートを決めていない人も、ひとまずすべてに目を通して、バンドで使用する楽器について学びましょう。

ミキサー



ドラム



エフェクター



エレキギター



キーボード



アンプ



エレキベース



エレキ・ギター



ギターはバンドをする上でとても重要な楽器です。バンドでは、電気で音を出す「エレクトリック・ギター（エレキ・ギター）」を主に使用し、ロックな激しい楽曲では、「ギーン！」と攻撃的なサウンドで盛り上げ、ポップな歌モノの楽曲では優しくボーカルをサポートします。また、ギター・ソロやイントロのフレーズを弾いたりすることもあり、多彩な音色を使い分けて楽曲のキャラクターを決めていきます。ギターの音色は「エフェクター」によって作られることもありますが、ギター本体である程度はサウンドが決まります。

Tips!

ピックアップ・マイクはエレキ・ギターの心臓部

アコースティック・ギターと違って、弾かれた弦の振動を電気信号に変えて音を出すエレキ・ギターは、「ピックアップ・マイク」というマイクロフォンが本体についています。基本構造は、ボーカリストが使うマイクと同じです。エレキ・ギターがエレキ・ギターであるための最も重要なパーツであるピックアップ・マイクには、大きく分けて2種類のタイプがあります。

それは、比較的「ジャキッ！」と鋭く立ち上がりの良い音が特徴の「シングル・コイル」と「ギーン！」と太く歪ませやすい「ハムバッカー」です。もちろん、たくさんのメーカーがいろいろなピック

アップ・マイクを開発しているので2択というわけではありませんが、今回紹介しているのは代表的なシングル・コイル・ピックアップです。



▲一般的な「ハムバッカー」タイプ

エレキ・ギター

ストラップ・ピン

ギターを肩から下げるための「ストラップ」をとめるピン。

弦

太さの違う6本の弦を使って演奏をします。

ピックアップ・マイク

弾いた弦の振動を拾うマイクロフォン。入力された音を電気信号に変えます。ネック側から「フロント・ピックアップ」「センター・ピックアップ」「リア・ピックアップ」と呼びます。

ブリッジ

弦をとめる土台。まずここに弦を通してから弦を張ります。

ボディ

基本的には木で作られたギターの本体。メーカーやシリーズ、年代によって様々な形と色があります。

ピック・ガード

演奏中にピックがボディを傷つけないようにするためのカバー。

トレモロ・アーム

ブリッジを動かして音程を変えるための取っ手。機種によって、付いていない場合があります。

ピックアップ・セクター

使用するピックアップ・マイクを選択するスイッチ。

ボリューム・ノブ トーン・ノブ

出力する音量や、ピックアップの音色（トーン）をコントロールするつまみ。

シールド・ジャック

アンプにつなぐ「シールド・ケーブル」を挿すジャック。



ストラップ・ピン

エレキ・ギター

ヘッド

弦を巻きつける「ストリング・ポスト」や弦を巻くための「ペグ」がある部分。弦の巻き方や、デザインによって様々な形があります。ストリング・ポストには、メーカーやシリーズによって弦の取り付け方や巻き方に違いがあります。



ジョイント

ボディとネックを組み合わせている部分。接着されていて外すことができない「セット・ネック」、ボルトで固定している「ボルトオン・ネック」があります。他に、ネックがボディ・エンドまである「スルー・ネック」という方法もあります。



▲ボルトオン・ネック

ナット

ネック側の弦の支点となるパーツ。素材は牛骨、カーボン、プラスチックなど。

ネック

指で弦を押さえて音程を決める棹のこと。基本的には木で作られていて、音程を決める「フレット」が打ち込まれている「指板」が貼られています。指板にはさらに、フレットの場所がわかりやすいように「ポジション・マーク」がついています。



▲縦の金属が「フレット」、白い丸が「ポジション・マーク」

ストリング・キャビティ

トレモロ・ユニットがあるタイプのギターには、ユニットを留めているスプリング（ばね）が収納されています。また、弦を張る時に通す穴もあります。



エレキ・ベース



電気で音を出す「エレクトリック・ベース（エレキ・ベース）」は、エレキ・ギターに似ていますが、弦が4本しかなくて太いというところが違います。全体的にギターよりひと回り大きいところも特長です。各部の作りと名称は基本的にギターと同じですが、そのサウンドと役割はまったく違います。バンドの中では、ドラムと共に「リズム隊」として演奏の土台を支え、低音で和音の響きを安定させます。音色はベース本体による部分が大きいです。が、「エフェクター」を使って様々に変化させることもあります。

Tips!

似ているようで違う、ギターとベース

エレクトリック・ベース（以下、ベース）は、エレキ・ギターと同様に、弾かれた弦の振動を「ピックアップ・マイク」で拾って音を増幅する仕組みになっています。また、専用の「アンプ」に「シールド・ケーブル」をつないで出力することも一緒です。しかし、大きなホールなどの会場で演奏する時や、レコーディングする時などは「ダイレクト・インジェクション・ボックス（DI）」という機材を通して出力する場合があります。

ギターよりも太い弦で、しかも4本と数が少ないベースは、ギターと似ているようで演奏の仕方、サウンドも、出力方法も異なります。もちろん、バ

ンドの中での役割も違います。ギターよりも簡単そうに見えて、知れば知るほど奥の深い楽器、それが「ベース」です。



▲一般的なDI

エレキ・ベース

ストラップ・ピン

ベースを肩から下げるための「ストラップ」をとめるピン。

弦

ベースは太さの違う 4 本の弦を使って演奏をします。

ピックアップ・マイク

弾いた弦の振動を拾うマイクロフォン。入力された音を電気信号に変えます。ネック側から「フロント・ピックアップ」「リア・ピックアップ」と呼びます。

ピック・ガード

演奏中にピックがボディを傷つけないようにするためのカバー。

ボリューム・ノブ トーン・ノブ

出力する音量や、ピックアップの音色（トーン）をコントロールするつまみ。

ボディ

基本的には木で作られたギターの本体。メーカーやシリーズ、年代によって様々な形と色があります。

ストラップ・ピン

シールド・ジャック

アンプにつなぐ「シールド・ケーブル」を挿すジャック。

ブリッジ

弦をとめる土台。まずここに弦を通してから弦を張ります。

エレキ・ベース

ナット

ネック側の弦の支点となるパーツ。素材は牛骨、カーボン、プラスチックなど。

ネック

指で弦を押さえて音程を決める棹のこと。基本的には木で作られていて、音程を決める「フレット」が打ち込まれている「指板」が貼られています。指板にはさらに、フレットの場所がわかりやすいように「ポジション・マーク」がついています。機種によって、長さやフレットの数が違う場合があります。



▲縦の金属が「フレット」、黒い丸が「ポジション・マーク」

ヘッド

弦を巻きつける「ストリング・ポスト」や弦を巻くための「ベグ」がある部分。弦の巻き方や、デザインによって様々な形があります。ストリング・ポストには、メーカーやシリーズによって弦の取り付け方や巻き方に違いがあります。



ジョイント

ボディとネックを組み合わせている部分。接着されていて外すことができない「セット・ネック」、ボルトで固定している「ボルトオン・ネック」があります。他に、ネックがボディ・エンドまである「スルー・ネック」という方法もあります。



ドラム



ドラムは、バンドの中で唯一電気を使わない楽器です。小太鼓（スネア・ドラム）や大太鼓（バス・ドラム）、シンバルなどの打楽器が組み合わさって1つの楽器になっていて、両手両足を使って演奏します。ギターやキーボードといった他の楽器と違って「音階」はありませんが、「生」楽器として大きさや用途の違う各楽器のチューニングや調整が必要です。それぞれのドラムやシンバルは、専用の「スタンド」によってセッティングします。そういった意味では、機材が最も多い楽器だと言えます。

Tips!

ドラム・セットは打楽器の集合体

ドラムは、正確には「ドラムス」と複数形で呼ばれます。いくつもの打楽器を「ドラム・セット」として組み上げるからです。それぞれの楽器は、バンドで演奏する時に役割があります。「バス・ドラム」と「スネア・ドラム」と「ハイハット・シンバル」は、「3点」とも呼ばれ、主にリズムを叩きます。タムタム類は、メロディーの合間やセクションの変わり目にフレーズを叩いたり、時にはリズムを刻みます。シンバルはアクセントを強調したり、リズムを刻むために使います。

ドラムは打楽器の集合体なので、セッティングしたり片付けるのに時間がかかります。それぞれの名

前や役割を覚えたら、ドラムを叩くテクニックと一緒に、セッティングの仕方も覚えていきましょう。



▲スタンド類を専用のケースに収納した状態

ドラム正面

タム・タム

基本は木で作られたドラム本体。小さくて高い音がするタムを「ハイ・タム」、大きくて低い音がするタムを「ロー・タム」と呼びます。専用の「タム・ホルダー」を使ってバス・ドラムの上にセッティングします。



クラッシュ・シンバル

アクセントをつける時に叩くシンバル。

ライド・シンバル

大きめのシンバルで、主にリズムを刻むために叩きます。

ハイハット・シンバル

小さめのシンバルを2枚合わせて専用のスタンドにセッティングして、リズムを刻みます。上を「トップ・シンバル」、下を「ボトム・シンバル」と呼びます。

フロア・タム

大きめのタム・タムで、専用のレッグで床に置くタイプのドラム。

シンバル・スタンド

シンバルを自立させるためのスタンド。長さや角度の調整ができます。

バス・ドラム

最も大きいドラムで、横向きで床に置き、専用のペダルを使って足で演奏します。



ドラム背面

スネア・ドラム

ドラム・セットの中で唯一、裏側に「スナッピー」という響き線が装着されているドラムです。スナッピーのオン／オフは、「ストレイナー」という装置で行います。



ドラム・ヘッド、フープ (リム)

すべてのドラムには、胴体（シェル）にプラスチック製の「ドラム・ヘッド」が両面に張られています。ヘッドを固定する枠を「フープ」あるいは「リム」と呼び、チューニングするためのネジを「テンション・ボルト」と呼びます。



スネア・スタンド

スネア・ドラムを自立させるためのスタンド。



ハイハット・スタンド

ハイハット・シンバルを自立させるためのスタンド。ペダルを踏むことによってトップ・シンバルを上下させることができます。



◀ トップ・シンバルを固定する「ハイハット・クラッチ」

ドラム・ペダル

バス・ドラムを足で演奏するためのペダル。ヘッドを叩くパーツを「ビーター」と言います。両足で踏む仕様の「ツイン・ペダル」もあります。



アンプ／エフェクター



エレキ・ギターやエレキ・ベースなど、電子楽器の発達とともに進化してきたポピュラー・ミュージックでは、楽器で演奏した音を増幅させる「アンプ」を使用します。真空管やトランジスタを使ったアナログなアンプからデジタルなものまで増幅の仕方はいろいろあります。ギターやベースのサウンド・メイクでは、ギター本体とアンプで音作りをすることが基本ですが、現代では音を様々に加工する「エフェクター」を使うことが多くなりました。1台で多様なエフェクトがかけられる「マルチ・エフェクター」が主流です。

Tips!

ポピュラー・ミュージックの命、アンプの種類

アンプには大きく分けて2種類のタイプがあります。それは、「トランジスタ・アンプ」と「チューブ・アンプ」です。その違いは、ギターなどから送られてきた電気信号をどうやって再び「空気の振動」に変えて増幅させるか、という基本構造にあります。電気についての難しい話は置いておきますが、ギターやベースはアンプとセットで音を出すものなので、無関心というわけにはいきません。

近年では、アンプ部分（ヘッド）とスピーカー部分（キャビネット）が分かれている「スタック・アンプ」タイプより、一体型になった「コンボ・アンプ」タイプが主流です。アンプ自体よりも、エフェ

クターを使って音色を作ることが一般化してきていることが理由かもしれません。音作りに関しても学んでいきましょう。



▲チューブ・アンプのスタック・タイプ

アンプ正面

インプット・ジャック

ギターなどから出力された信号をアンプに伝えるために「シールド・ケーブル」をさす場所。

イコライジング、歪み（ひずみ）、その他の調整つまみ

メーカーや機種によって様々ですが、入力された音を加工するためのつまみです。主に音量「ボリューム」、高音域「トレブル」「ハイ」、中音域「ミドル」、低音域「ベース」「ロー」、歪み「ゲイン」「ディストーション」、共鳴「リバーブ」などがあります。



電源スイッチ

アンプの電源をオン／オフするスイッチ。



スピーカー

増幅された音を出力します。ライブなどではここにマイクを当てます。

キャスター

移動用のタイヤ。取り外すことも可能です。

アンプ背面

電源コンセント差込口

AC 電源を取るためにコンセントを差し込む場所です。



リア・パネル

アンプには背面にもシールド・ケーブルを挿すジャックがあります。機種によって様々ですが、主に、「ライン・アウト」「センド」「リターン」のジャック、フット・スイッチ用のジャックです。



エフェクター

リア・パネル

主に、ギターなどから信号を受け取る「インプット・ジャック」、加工した音をアンプに送る「アウトプット・ジャック」「電源差込口」などがあります。



▲ USB メモリをつなぐこともできます

ディスプレイ

フット・ペダル

ボリューム・ペダルや様々なエフェクトの変化をつけるために使用します。



パラメーター、エフェクト、バンク

エフェクトの調整や各種設定を操作して自分の好みの音を作り、バンクに保存することができます。

フット・スイッチ

エフェクトの選択やオン／オフ、バンクの選択などを行います。

キーボード／ミキサー



バンドの演奏や楽曲に華を添えるキーボード。現在では、キー（鍵盤）がある楽器を総称して「キーボード」と言い、大きく分けると「ピアノ」と「シンセサイザー」があります。ピアノにはグランド・ピアノのような「生ピアノ」と「電子ピアノ」があり、電子回路によって様々な音が出せるキーボードのことをシンセサイザーと言います。シンセサイザーは、他の楽器に比べて操作が難しく感じるかもしれませんが、まずは各部の名称と役割を覚えましょう。今回はキーボードのほかにボーカルのマイクなどもつなぐ「ミキサー」も紹介します。

Tips!

古くて新しい楽器、「キーボード」。

ご存知の通り、「ピアノ」という楽器はとても古くから存在していて、「楽器の基本」とも言われています。一方「シンセサイザー」は、電子回路を使って様々な音を出す比較的新しい楽器で、1980年代頃から一般化しました。シンセサイザーの音を出すためのスイッチは、ピアノの鍵盤と同じ形になっているので、どちらも「キーボード」と呼ばれます。

ピアノにもグランド・ピアノのような生ピアノだけではなく、電子回路で音を出す「エレクトリック・ピアノ（エレピ）」があります。エレピは、ピアノ以外の音も出すことができますが、生ピアノのように鍵盤を押した時に重くなっているのが特徴です。

一般的には、ソフト・タッチのキーボードのことをシンセサイザーと呼ぶこともあります。



▲一般的なエレクトリック・ピアノ

キーボード

フロント・パネル

メーカーや機種によって様々ですが、ボリュームを調節するつまみ、演奏中に音を加工するためのつまみ、基本となる音色を選択するつまみ、ディスプレイ上で音を加工するつまみ、録音／再生ボタン、ドラム・シーケンス選択ボタン、作った音をメモリーしておくボタン、バンクを選択するボタンなどがあります。



リア・パネル

電源ボタン、ACアダプター接続端子、ヘッドフォン・アウト、インプット端子、アウトプット端子、USB端子、MIDI端子などがあります。



ディスプレイ



コントローラー

ピッチ（音程）を変えたり、音を揺らしたりするノブ。様々なプログラムやエフェクト・パラメーターなどもコントロールします。



鍵盤

ピアノと同じ配列に音階が並んでいます。様々な音を出すスイッチでもあります。同じシリーズに61鍵、76鍵、88鍵がライン・アップしていることもあります。

マイク

マイク・ホルダー

マイクを専用のマイク・スタンドに固定するためのホルダー。マイク・スタンドには「ストレート・スタンド」と、主に楽器を演奏しながら歌うボーカリスト用の「ブーム・スタンド」があります。



▲ブーム・スタンド（左）とストレート・スタンド（右）

グリル

マイク本体をカバーしている金網。洗浄可能。



マイク・ケーブル接続口

専用のシールド・ケーブルを接続します。

ミキサー

インプット端子

ボーカル・マイクやキーボードなどから送られてきた信号をケーブルで入力する端子です。

リア・パネル

AC 電源差込口、電源スイッチ、アウトプット端子、USB 端子などがあります。

アウトプット端子

大きなスピーカーに出力するメイン・アウトの他に、「モニター・アウト」「ヘッドホン・アウト」などがあります。



ディスプレイ

トラック別操作つまみ

トラックごとの音色、アウトプット、左右の定位などを調整するつまみです。

スライド・フェーダー

トラックごとのボリュームを操作したり、グループごと、全体のボリュームを操作します。